

・研究開発実施上の問題点 及び今後の研究開発の方向

1．実施上の問題点

1) いじめへの対応・不登校生への支援 の取組における問題点

ひろがる生活破壊

- ・校区においては年々、ひとり親家庭、保護家庭の率の増加が進んでいる。生活状況の変化や経済的な問題が保護者を苦しめ、子どもたちを取り巻く環境に大きく影響している。子どもたちの中にはストレスが増加し、自己肯定感への影響も大きい。保護者へのソーシャルワークや関係諸機関との連携がより重要となってきた。

人間関係の希薄化

- ・核家族化と少子化の進行による「家庭」の変化やゲーム、携帯といった情報機器の氾濫が子どもたちの関係に大きな影響を与えている。そこから生まれる人間関係の希薄化や人間関係への不信が、子どもたちの自己肯定感や社会的有用感育成の妨げとなっている。人間関係学科の実施を通じて、子どもたちにコミュニケーション力をはじめとする生き方にプラスになる様々な力を身につけさせたい。

小中のギャップ

- ・子どもたちの生きていく力が低下してきたことにより、小学校から中学校への進学の際に、それが不登校やいじめという形であらわれるということも明らかになってきている。今回の研究開発では、小中合同で小中のギャップというものをとらえ、双方どういうアプローチでその課題を埋めていくかということを研究としていきたい。

2) 人間関係学科推進上の問題点

学校生活調査・生活アンケート等の集約・分析方法

- ・2003年度からの松原七中での研究開発の成果から、子どもの実態把握、効果測定のための、アンケート調査・データ分析が有効であることが明らかになった。しかし、この有効性を校区で確認し、実施していくまでに時間がかかった。
- ・効果測定を校区や各校で組織的に取り組んでいくための、小・中共通の基礎データのフォームが必要である。調査毎のデータ一覧は作成しているが、子どもの変化や成長を見ていくための

推移が確認できる資料を三校合同でもつ必要がある。

合同の会議・研修

- ・松原七中校区で実施する研修や会議と各校の学校・学年行事の調整の難しさがある。月一回の校区研究開発企画委員会の開催も、時間の確保が難しい。また、それに向けての各校担当者の打合せも同様である。
- ・研修の設定においても、各校の状況の違いやニーズの違いにより、課題設定の難しさがある。また、各校個別の研修においても、研修内容の共有化や、方向性の統一が課題である。

教員のスキルアップ

- ・人間関係学科は、ワークショップなど参加・体験型の学習を進めるため、新しい学習スタイルを学ぶ必要がある。「場づくり」・「ねらいの共有」や子どもの「気づき」・「ふりかえり」を大切にしていくためのスキルアップが不十分である。恵我小・恵我南小では、研修を積み重ねながらも初めての取組であることでの戸惑いは大きい。また、松原七中は、教員の入れかわりによる世代交代により、これまでの成果をこれからの世代の教員へとどうつないでいくかが問題となっている。

2．今後の課題

1) いじめへの対応・不登校生への支援 に取り組む上で

松原七中校区としての不登校生支援

- ・松原七中校区不登校児童・生徒支援会議を中心にして、不登校を未然防止し、不登校生を支援していくための共通認識を七中校区の教職員が持つ必要がある。欠席者・遅刻者の実態把握、支援の具体的内容などを各校で方針化し、校区で共通認識を得るための体制づくりを行う。

いじめの未然防止と子どもたちへの支援のために

- ・松原七中における人間関係学科の創設と不登校生への支援から始まった、子どもたちが「楽しいと思える学校づくり」が子どもたちどうしの関係性、子どもと教師の関係性を強めてきた実績を、校区で更に検証していく。

2) 人間関係学科に取り組む上で

11年間のカリキュラム創造

- ・恵我小・恵我南小における本年度のプログラムづくりの成果にたって、小学校の発達段階にお

ける6年間のカリキュラムづくりに着手する。

- ・松原七中においては、現在あるカリキュラムを、小学校のプログラムを発展させたものへのつくりかえや、ターゲットスキルを読み替えることにより、小学校からの積み上げをはかる。また、「自分と社会をつなげていく力」を養うための、スキルアップしたワークづくりに取り組んでいく。
- ・子どもたちの社会的有用感を育て、地域において子どもたちが人間関係づくりの主体者となるように、幼・小・中の子どもたちのつながりをつくっていく取組からはじめ、大人と子どもがつながっていくための取組も追求していく。
- ・恵我幼稚園と連携し、就学前における「あそび」から人間関係づくりにつなげていく視点と、小中における人間関係学科とのつながりを追求する。

人間関係学科実施に向けた教員のスキルアップ

- ・人間関係学科の授業を実施する教員の力をつけていけるために様々な研修を計画したり、自己研鑽を進めていくことが必要であるが、それだけではなく、専門家からのスーパーバイズを含めた組織的なスキルアップの体制づくりを行う。

継続的・効果的なデータ集積・分析

- ・現在、実施している学校生活調査・学校生活アンケート、ふりかえり用紙などのデータを、子どもへの支援やプログラム作成に生かすことができるようなアンケート調査をする必要がある。
- ・恵我小・恵我南小において自己肯定感の測定に有効なアンケート項目の設定や実施方法の具体化を行う。
- ・子どもたちのソーシャルスキルや学級・学年集団における子どもたちの満足度や効力感を測定していくための新たなアンケート調査を試行する。

専門家との連携

- ・人間関係学科の創設や効果測定における研究開発の「在り方」や「方向性」をどう持っていくかという点で、心理学や社会学の専門家との連携は欠かすことができない。人間関係学科が社会の流れを先取りし、子どもたちにこれからの社会をどうつくっていくかという視点を育んでいくために、様々な分野での研究成果に学び、取り入れていく必要がある。